

P-099

養護教諭のフィジカルアセスメントに関する実施状況および自信について～新型コロナウイルス感染症流行を経験して～

佐藤 伸子¹、葛西 敦子²、福田 博美³、山田 玲子⁴¹熊本大学教育学部²元弘前大学教育学部³愛知教育大学⁴北海道教育大学

【緒言】

学校で子どもの保健管理を担う養護教諭には、的確なフィジカルアセスメントが求められている。しかし先行研究により、養護教諭は偏った観察を実践していることや収集したデータを的確に判断し対応することへの困難さが報告されている。令和2年2月28日に新型コロナウイルス対策として全国の学校で休校が要請された。そこからの約3年間は子どもの観察における感染症の判断機会が増加し、養護教諭が実施する観察項目に変化が起きていることが推察される。本研究の目的は、COVID-19流行期を経験した養護教諭のフィジカルアセスメントに関する実施状況および自信について検討することである。

【研究方法】

2023年7月～12月に実施した3地点での研修会を受講し、本研究の趣旨に同意の得られた養護教諭を対象に質問紙調査を行った。質問項目は、バイタルサイン（体温、脈拍、呼吸、血圧、意識）、顔色、瞳孔、SpO₂等について「実施状況」、「観察技術への自信」、「観察結果の判断を対応に活かす自信」の3つの観点で構成した。倫理的配慮については、文書等で研究の趣旨を説明した後、Google Formsで無記名により回答を求めた。回答の入力・送信をもって協力への同意が得られたものと判断し、146人を分析対象とした。

【結果と考察】

養護教諭が全員実施していた観察項目は、体温と顔色であり、SpO₂ 95.9%、脈拍89.7%、血圧82.9%、意識状態79.5%、呼吸状態60.3%で、聴診（呼吸音・聴音）や瞳孔の観察は10%台であった。血圧および呼吸状態の観察実施率は、先行研究と比べ高くなっており、コロナ禍の経験も一因と考えられる。体温と顔色を除く観察項目において、「実施状況」と「観察結果の判断を対応に活かす自信」の関連が見られたことにより、判断基準を修得することの重要性が示唆された。

詳細は当日発表する。本研究は、JPSS科研費23H00975および22K10954の助成を得て実施した。

P-100

スコーピングレビューによる日本の学校看護師に関する研究の現状と課題～地域の小中学校と特別支援学校の学校看護師の比較を通して～

多田里胡奈¹、千原 裕香²、後藤 亜希²、西 真理子²、戸部 浩美²¹石川県立看護大学看護学部²石川県立看護大学

【背景】

2021年「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」が公布され、医療的ケア児が地域の小中学校に通うための教育体制が整えられるようになった。令和4年度学校における医療的ケアに関する実態調査で地域の学校と特別支援学校では実施している医療的ケアに違いがあることが明らかになったが、それぞれの学校看護師の役割や課題は明らかになっていない。そこで本研究では、近年増加している地域の小中学校の学校看護師に関する研究の動向を把握し、今後の課題を見出すことを目的とした。

【方法】

スコーピングレビューのための報告ガイドライン日本語版：PRISMA-ScR5に従ってスコーピングレビューを行った。検索語を「学校看護師」とし、4つのデータベースを用いて検索した。得られた全ての論文を研究者2名が独立してスクリーニングを行い、各スクリーニングの結果を照らし合わせ協議し採用文献を決定した。発行年、研究デザイン、研究対象について抽出し、「地域の小中学校の学校看護師」に関する結果と「特別支援学校の学校看護師」に関する結果に分類しながら、研究概要と結果をまとめた。

【結果】

2003年から2023年の20年間に発表された計54件の論文が対象となった。特別支援学校に関する研究が48件あったのに対し、地域の小中学校に関する研究が6件と非常に少なかった。研究対象は学校看護師の他、教職員、保護者、医療的ケア児が含まれていた。地域の小中学校の学校看護師の特徴として、医療的ケア児と周囲の子供たちの関係をサポートする役割があること、「学校行事の中で医療的ケアを行うための研修」を求めていること、本人の集団生活の現状と保護者の期待の違いに葛藤を抱えていることが明らかとなった。

【結論】

地域の小中学校の学校看護師は、特別支援学校の学校看護師とは異なる役割や葛藤があり、求めている研修も特徴的な内容であった。これは、地域の小中学校に通う医療的ケア児とその保護者は障害のある者とそうでない者が共に学び合うインクルーシブ教育を求めていることに関連してと考えられる。地域の小中学校に通う医療的ケア児は今後も増加していくことが予測され、インクルーシブ教育促進を目指して地域の小中学校の学校看護師に焦点をあてた研究の発展が望まれる。